

法華仏教研究

第22号

日蓮にみる女人救済（統括版）……………	間宮啓壬（1）
日蓮聖人の本尊論とその展開……………	三浦和浩（68）
日蓮聖人の生涯と遺文の考察（五）……………	川崎弘志（88）
『富士一跡門徒存知事』成立年に関する一考察……………	川崎弘志（122）
本因教主論の一哲学的考察……………	尾崎誠（138）
ドイツ人仏教徒の自己理解について……………	松戸行雄（160）
本化ネットワークから法華コモンズへの軌跡……………	澁澤光紀（178）
<hr/>	
本の紹介……………	（206）
<hr/>	
東佑介氏の『宗教問題』誌の連載を読んで（その1）……………	川崎弘志（217）
星野健一氏の論評に対する反論……………	植木雅俊（268）
<hr/>	
編集後記……………	（279）

2016（平成28）年5月

法華仏教研究会

ドイツ人仏教徒の自己理解について

松戸 行雄

はじめに

今回報告する内容は、私自身が二〇一四年夏にドイツ仏教連盟（DBU）の会員に対して実施したアンケート調査の結果についてである。¹先に『法華仏教研究』第二十一号（二〇一五年一〇月刊）に掲載された「日蓮仏教の現代的再構成のために」と題する論考の中で、私自身は「欧米における日蓮仏教の現代的受容に焦点」（同、一四五頁）を当てていることを強調し、その文化的背景の証左としてこの調査結果に言及している。その関連で花野編集長から執筆を依頼された次第である。

ドイツ仏教受容史と仏教連盟

ドイツで仏教が紹介・受容され始めてからかれこれ二百年になる。『意志と表象としての世界』（一八一九年初刊）を著した哲学者のショーペンハウアーは自ら「ブダリスト」と称したほど、仏教に傾倒していた。ニーチェやワグナーなどに

多大な影響を与えている。一九〇三年にはカール・ザイデンシュテッカーがライプチヒにドイツで最初の仏教団体を創立。ヘルマン・ヘッセの小説『シッダールタ』（一九二三年初刊）は仏教へのロマンを掻き立てた。最初に文献的にも実践的にも受容されたのは上座部仏教で、次にオイゲン・ヘリゲルの『弓術における禅』（一九四八年初刊、和訳では『弓と禅』）で象徴されるように禅ブームが続く。日蓮仏教は創価学会によって世界的に広まる中で一九六〇年代から受容されてきている。チベット仏教がドイツで普及するのは一九八〇年代からで、今では各地に仏教センターを持つ主流となっている。その他、ベトナムやタイ系の仏教センターもあるが、これは民族的・伝統文化的な側面が強く、ドイツ人が受容し、実践する仏教とはまったく別の流れとなっている。

こうした背景から、現在のドイツには日本、韓国、チベット、スリランカ、ベトナム、タイなどのアジア系の仏教宗派と、さらに西欧で新たに創設された（例えばFWBOなど）多くの仏教団体も活動している。そこで、実に多様な仏教宗派・教団を統括すべく一九五五年にドイツ仏教協会（DBG）が創立され、三年後にはドイツ仏教連盟（DBU）と改称されて今日に至っている。現在、六四の仏教団体と二千六百人程の個人会員が登録されている。

DBUの最大の特徴は、定款にも明記されているように、全会員が互いの宗派を超えて唯一の「仏教信仰告白」を共有することである。アジア各地で発展してきた上座部、大乘、金剛乗等の実に様々な仏教的伝統の共通点を、最低限の必要條件を初期仏教に求めている。仏法僧の三宝帰依と四諦と八正道である。その上で、「私は全仏教徒の統一を告白し、本共同体の全会員に対して尊敬と開いた心で接していく²」ことを誓う。これは一九八四年の総会で決定された時点では、世界でも類を見ない画期的な共同声明である。日本でもチベットでも仏教宗派は互いに醜い抗争を繰り返してきたが、遠く離れたドイツで共存共栄するためには、宗派的教条主義・排他主義を越えねばならない。逆に、仏教振興のための新たなチャンスでもある。

さて、私がこのDBUの会員に対して調査を実施した背景には、妻がDBUの評議員並びに宗教間対話代表者に任命されたことから、ドイツ仏教の宗派を超えた全貌を把握し、内外に報告する必要性に迫られたためである。

アンケート調査の内容

- 意識調査の性格から「仏教の魅力ードイツ人が仏教に帰依する動機について」と題して、十二項目の質問を用意した。
- 一、仏教に興味を抱いた一番最初の出会いは何でしたか？
 - 二、その時、何を魅力的だと感じましたか？
 - 三、仏教を継続して実践するようになった要因は？
 - 四、現在所属している宗派に決めた要因は？
 - 五、あなたのサンガでの身分は？
 - 六、僧籍にある場合、僧尼になった最大の理由は？
 - 七、仏教を実践して何年になりますか？
 - 八、仏教徒になる以前の所属宗教は？
 - 九、その改宗の最大の理由は？
 - 十、現在でも魅力を感じている要素は何ですか？
 - 十一、仏教実践を通しての具体的な体験は？あなたの人生で何が大きく変わりましたか？
 - 十二、ドイツにおける仏教に何を望んでいますか？

各質問には予想される回答をマルチプルチョイスで選択できるようにしたが、同時に自分独自のコメントを補足できるように工夫した。全体のサンプル数や各宗派からの回答率等で統計学上の問題はあがるが、とりあえず「傾向」を示すというところでご了承願いたい。

アンケート調査への回答数

最終的には五七八名からの回答があり、その中で個人会員は一二五名であった。男女半々で、年齢的には十七歳から八十四歳までと幅広いが、平均年齢は五十歳となる。修行年数は一年未満から五十年までと差が大きい。平均すると十五年となる。僧尼は十四名で全体の2%だけで、ほとんどが在家仏教徒である。また、回答者の99.5%がドイツ人である。

宗派別の内訳は表1の通り。主流四派で構成されるチベット系が半数を占めるが、これはそのままDBUの構成に相当すると

表1

2014年9月1日時点の集計	全数 578		その内 125		国別合計	%
	宗派	個人	宗派別合計	%		
チベット系					305	52,8%
カギユ派	224	2	226	39,1%		
その中の「金剛道」	(192)	(0)	(192)	(33,2%)		
ニンマ派	46	1	47	8,1%		
その中の「リグバ」	(43)	(1)	(44)	(7,6%)		
ゲルク派	13	5	18	3,1%		
サキャ派	2	0	2	0,3%		
その他	3	9	12	2,1%		
日本系					77	13,3%
曹洞宗	35	7	42	7,3%		
臨済宗	19	0	19	3,3%		
日蓮サンガ	10	0	10	1,7%		
浄土真宗	3	0	3	0,5%		
その他	1	2	3	0,5%		
韓国系					55	9,5%
ユンファ・サンガ	50	1	51	8,8%		
クワンウム禪	4	0	4	0,7%		
上座部系	26	22	48	8,3%	48	8,3%
ベトナム禪系	12	2	14	2,4%	14	2,4%
その他、不定	3	76	79	13,7%	79	13,7%

見なしてよい。中でもデンマーク人のオレ・ニダールが一九七二年に創設したカルマ・カギユ派の Diamantweg (金剛道) はドイツで急速に発展し、欧州でも最大の勢力を誇っている。次にソギャル・リンポチエが主宰するニンマ派のリグパ教団からの回答が多かった。こうした回答を基に全体の傾向と、宗派別の傾向を評価するが、後者では回答数が十に満たない団体は無視することにした。サキヤ派、浄土真宗、クワンウム禪と「その他」がその対象となる。また、宗派別の評価の簡素化のために、曹洞宗と臨済宗は、他の伝統宗派と比較した場合に教義と実践の面で差が僅かとなるため、一緒に「日本の禪」としてまとめた。日蓮サンガは私が主宰する仏教団体であるが、DBU内では唯一の日蓮系となる。

仏教との最初の出会い

第一問の「仏教との最初の出会い」については、ヘッセの小説や仏教紹介の本を読んだか(21%)、アジアに旅行して仏教寺院や尼僧を見て感銘した(8%)、ダライラマをテレビで見た、身近に在家仏教徒の友人・知人がいる(24%)、仏教に関する講演を聞いた(16%)等、多種多様な機会がある。また、複数の出会いが交錯する。ところが興味深いことに、そうした外面的な出会い以上に、最大の要因は「人生の悩み」(全体との比較で28%)を抱えている中で仏教に「救い」を求めたことである。これは、全体の割合ではなく個別に独立して見ると、実に回答者の半数(578人中295人で51%)に相当する。

「仏教に救いを求める」という意味はより具体的に、「人生の意味を求めていた」(578人中230人で40%)、「恋愛関係で悩んでいた」(19人)、「自身の病気で苦しんでいた」(18人)、「愛する人の死を体験した」(21人)、その他若干だが交通事故に遭ったり、不安を抱いていたなど、言わば「人生の危機」に遭遇していたのである。

つまり、現代のドイツ人は単に興味本位にエキゾチックな哲学・宗教としてよりは、具体的に人生の根本問題解決のための糸口を仏教に求めていると言える。この実存的問題が重要になる背景には、ドイツにおけるキリスト教の衰退に関連している。教会脱退者が後を絶たず、もはや人々に人生の指針や指導原理を提供できない状態にある。

仏教に何を求めたのか

二番目の問いに対する回答がその辺の事情を説明してくれる。仏教との最初の出会いで一番魅力的だと感じた点は、全体の六項目の中で「教義の性格」(29%)、「教義そのもの」(21%)、そして瞑想や読経などの「実践」(22%)なのである。これに続いてラマや友人・知人の在家仏教徒の考え方や振る舞いに感銘している部分もある。この「教義の性格」を個別に見ると回答者の72%が最も重要な要素として見なしているが、その内訳を細分化すると次の表2の通りである。

最初の三つの項目はキリスト教的な教義の性格を嫌う要素に対応している。

神を中心とせず、教条主義・独善主義・排他主義的でないこと。積極的に表現する場合には「自己責任倫理と人生肯定的精神性」の観点から仏教全般の最大の魅力となっている。これは、五戒・八正道・業の因果律からでも、また大乘的な仏性論や変毒為薬の転換の原理からでも、仏教を個人主義的な自己責任と主

表2

教義の性格			
超越神の概念がない	158	27%	[13%]
教条主義的でない	149	26%	[12%]
独善的・排他的でない	123	21%	[10%]
自己責任倫理	245	42%	[20%]
精神的志向性	141	24%	[11%]
前向きな人生観	156	27%	[12%]
カルマの変革	138	24%	[11%]
生活状況の転換	147	25%	[11%]
	1.257		100%

体的な生き方の志向性を持つ宗教として受容していることを意味する。

キリスト教との関係

この関連で、八と九の改宗に関する回答をまとめて評価しておきたい。近年、プロテスタントとカトリックの二大教会では教会脱会者が増加しており、信徒を仏教に獲られてしまうのではないかとこの危惧もある。そこで二大教会との関連だけに焦点を当てると、「仏教と関係なく教会を離脱した」のは270名の56%で、仏教と出会ってから教会を離脱した人は110名の23%となっている。この数には最初から無宗教の人は含まれていない。つまり、仏教が教会離脱に直接関わっているのは五人に一人程度で、信徒が教会を離脱していくのは教会内部の要因が大きいということの意味する。

さらに興味深い点は、仏教徒と自称するドイツ人の21%に当たる99名が改宗していないという事実である。教会が運営する慈善団体や医療関連施設に従事する場合、職を保つためには仏教徒であることを公言できないが、その該当者は二名だけである。つまり、この場合も五人に一人はキリスト教徒でありながら、同時に仏教に帰依し、実践しているという二重国籍ならぬ二重宗籍を保持していることになる。例えば日本では檀家制度の枠組みでも新興宗教教団への所属でも、その宗派に排他的に属することを基本としている。ましてやキリスト者が自分の信仰を保持しながら日蓮宗の檀家となったり、創価学会に入会することは想像しにくい。二者択一を迫られるのが通常であろう。ドイツの仏教運動では、全体として宗派の垣根が低いという特殊事情がある。実際、先のDBUの信条に対応する形で、各地の仏教センターではチベット系と上座部系と禅系の禪定実践が並行してプログラムに組み込まれて提供されているケースがある。会場提供側も寛容だが、参加する実践者にも選択の自由が任されている。こうした自由を享受しているのが、特定の宗派に属さないで仏教を

学習・実践する個人会員なのである。

改宗の動機

キリスト教から仏教へと改宗した最大の理由は、「教会税の支払い」(16%)や「幼児期からの教会への疎遠関係」(14%)以上に、「教義の教条主義的傾向」(45%)と「教会や牧師・神父に対する信頼の喪失」(25%)である。これは全体を100%とした場合の割合で、各理由を個別に見た場合には、教義の問題は66%、信頼の問題は38%にも上る。このことは逆に、ドイツ人が仏教に期待している問題と関係している。

実践継続の動機

最初の出会いから具体的に仏教を実践し続けていく動機に関する第三問では、四つの回答を用意した。内面的安寧や悟りや苦悩からの脱却などの「実践の目的」、仏法僧への「信頼関係」、禪定や精神修養などの「実践」、そして心身両面の改善やスピリチュアルな「体験」である。この中で実践の具体的な目的ないし志向性(36%)と信頼関係(24%)が重要であるが、各項目の詳細のある計算式に従って得点順に並べると、次表3のようにまったく別の側面が見えてくる。

表3

実践継続の動機	
師匠への信服	221
教義に対する信頼	205
禪定の実践	200
内面的安寧への努力	198
改善された精神状態の体験	188
精神的体験	176
仏性開発への努力	165
人格形成への努力	156
悟りへの努力	137

「師匠への信服」が最大の動機になるのは、チベット仏教系が回答者の過半数を占めるためであろう。ゲルク派を除いたチベット仏教系では、ラマ（師僧）を崇拜し、師弟関係を通して教えを伝授してもらった形態が中心になるからである。日本の禅でも師匠の存在は重要であるが、指導する先生としての意味が強く、ラマ中心主義のように生き仏に対するような崇拜・信服の対象とはしない。ただし、法華経を根本経典とし、ハワイに本部を置くユンファ・サンガ教団では、韓国人尼僧ジ・クワン・デー・ペブ・サ・ニムを教主として崇めているという印象を持つ。こうした師弟関係を重視する傾向を持つ宗派に対し、上座部系や、ベトナムの禅僧ティク・ナット・ハンが主宰するインタービーイングという教団では教義と実践が中心になる。

宗派選択の基準

仏教を学習・実践する場合、通常では特定の宗派を選択することになるが、第四問ではその選択基準として四つの要因を挙げた。結果は、教義の特徴（36%）、師匠への信頼（27%）、体験の有無（24%）、実践の重視（13%）の順で評価された。当然、すべて重要なのであるが、ドイツ的仏教受容において特に重要な観点は教義の特徴・性格に関する項目で、その内訳は次表4の通りになる。

仏教の理論と実践に関しては、より伝統的な面を重視し、そこに「母国文化の真実性」を感じ取るうとするのか、または簡単明瞭で易行の現代的な志向性に惹かれるかは意見が分かれるところである。事実、仏教のスーパーマーケットのように多種多様な形態が提示されているので、どれを選択するかは最終的には「個人の好み」の問題であろう。ただし、一般的傾向としてはチベット仏教の中で最も急速に拡大発展したのは、ラマ中心主義を取りながらも現代的志向性を表に出している在家仏教徒主体の金剛道である。その対極にあるのが世俗社会逃避の尼僧・僧院中心で、袈裟も含めて伝統保持型に属する日本の禅宗である。会員数も増えにくい状況である。

ここで、再び第四問の四つの要因の相互関係を宗派別に見てみると次表5になるが、教義学習の重要性についてはどの宗派でも異論がない。差異を読み取れるのは残りの三つの要素となる。チベット仏教系は他宗と比較した場合、やはり多かれ少なかれラマ中心主義を採用しているため、「師匠信服型」(MO)となる。これに韓国系のユンファ・サンガ教団も属する。次に、個人会員もさることながら、インタービーイング、上座部系の仏教は禅定や日常生活での気付きに重点を置く「実践重視型」(PO)となる。凡夫本仏論を基本とする日蓮サンガの場合、師匠への信頼関係と唱題行の実践の重要性が共に0%という極端な結果が出ている。これは会員が、師匠は即身成仏・一生成仏のための妙法であり、唱題行は瞑想自体が自己目的という禅定型実践形態とは異なり、仏性薫発・宿命転換等の日常生活における改善のための実践だと理解しているためである。

表5

	教義	師匠	実践	体験
総合平均値	[37%]	[24%]	[14%]	[26%]
リグパ派	[28%]	[38%]	[9%]	[25%]
カギユ派	[33%]	[33%]	[11%]	[23%]
ユンファ・サンガ	[26%]	[33%]	[13%]	[27%]
金剛道	[38%]	[30%]	[9%]	[22%]
ゲルク派	[36%]	[28%]	[16%]	[20%]
MO	[32%]	[32%]	[12%]	[23%]
個人会員	[46%]	[21%]	[16%]	[17%]
日本禅	[33%]	[19%]	[22%]	[26%]
インタービーイング	[33%]	[19%]	[22%]	[26%]
上座部系	[38%]	[14%]	[19%]	[29%]
PO	[37%]	[18%]	[20%]	[25%]
日蓮サンガ	[56%]	[0%]	[0%]	[44%]

表4

その理論と実践は	得点数	%
西洋文化に適合している	160	[26%]
前向きな人生形成に役立つ	142	[23%]
奥深く複雑である	96	[16%]
人格形成に役立つ	88	[14%]
単純で容易である	74	[12%]
伝統保持的である	53	[9%]
合計	613	100%

この三つのタイプを、煩雑さを避けるために平均値だけで
図6に示す。

仏教の魅力とは？

最後に紙面の都合から、第十問の回答結果についてののみ言
及しておきたい。これは仏教を学習・実践してきた経験を踏
まえて現在でも魅力を感じる要素について意見を聞いている。
回答は、例によって教義、師匠、実践、体験のほかに、価値
観と人生の意味について重要と思われるものを選択する。教
義の学習（34%）と実践（22%）の重要性は実践開始当時と
ほとんど同じであるが、意外なことに、全体として師匠の意
味付けが（当初の35%から18%に）減少している。これは一
つの仮説であるが、第十一問の結果に見られるように、仏教の実践によって大部分が肯定的な体験を積み重ねている。自
分の人生や他人に対する姿勢が前向きになり、不安や怒り、罪悪感や劣等感を克服し、また心の平安と自分自身との調和
を感じるようになったという結果が出ている。自分自身を容認し、信頼し、かつ自信を持てるようになったわけである。
そのために師匠への関係も、最初の憧れに似た盲目的な信服から教えを受ける先生というより理性的な師弟関係へと変化
していると理解できよう。

さて、教義に対しては81%の回答者が魅力を感じている。具体的には十二個の仏教概念と思想の志向性を挙げてあるが、
「自己責任倫理」、「悟り」、「人生の転換」等の順位で好感が持たれる。

ここで、宗派別の教義の志向性を見てみる。煩雑さを避け
るために、表7のように、三つのカテゴリーを適用してみた。
カテゴリー別に集計すると次表8のようになる。

この図表は、各宗派の志向性を示している。当然、どの宗
派も「I 仏教の基本理念」と、スピリチュアルな意味での
「II 精神的修養」、並びにそれを基盤とした「III 日常生活への
関わり」という要素を持っているが、その比重が異なる。日
本禅を例に取ると、悟り、空、苦悩からの解放など仏教の基
本理念が重視され、その方向で修行が実践される。したがっ
て、全体的に現世への関わり方は制限され、内面に重点が置
かれる。その意味では「内面的精神性を重視する内省型」と
表現したい。チベット仏教系も基本的には禅定実践を重視
し、保守的な伝統保持の傾向を持つので、このタイプに属す
る。唯一の例外が金剛道であるのは一貫している。他方、内
省型の対極にあるのが日蓮サンガで、自己責任倫理は同じよ
うに重要だが、宿命転換の原理を活用しながら自己実現を目

表6

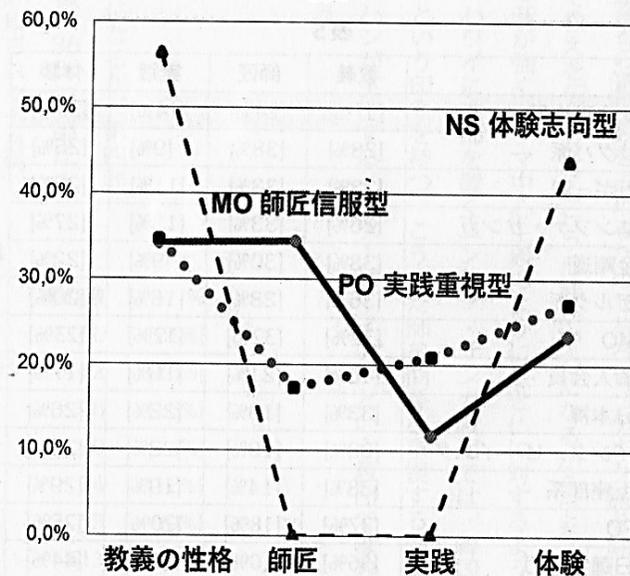


表7

I. 仏教的基本理念
悟り
カルマ
再生
縁起
空
意識論
II. 精神的人生観
苦悩からの解放
自己責任倫理
内面への精神的志向性
III. 積極的な人生形成
人生肯定的志向性
否定的な生命傾向の変革
生活状況の転換

表8

	I 理念	II 精神性	III 人生形成
合計	[41%]	[26%]	[33%]
ゲルク派	[57%]	[28%]	[15%]
日本禅	[52%]	[29%]	[19%]
カギユ派	[56%]	[23%]	[21%]
リグバ派	[53%]	[19%]	[28%]
個人会員	[43%]	[29%]	[28%]
上座部系	[39%]	[33%]	[28%]
金剛道	[38%]	[33%]	[29%]
ユンファ・サンガ	[41%]	[26%]	[33%]
インタービーイング	[36%]	[21%]	[43%]
日蓮サンガ	[0%]	[16%]	[84%]

DBUの団体会員はそれぞれの「伝統宗派」と同時に全体として一つの「仏教」団体に属するという二重性を特徴とする。母国では抗争を繰り返してきたとしても、ドイツで受容される場合には、教条主義を放棄してそれから自由になる

二、二重宗籍の意味

DBUは六四もの多様な宗派団体を包括し、唯一共通の三宝帰依をもって仏教の信条とする。本来、各宗派の伝統教義上では「仏」と「法」の内容には大きな相違がある。阿彌陀仏も久遠本仏も大日如来もあるが、DBUでは歴史上の釈迦牟尼仏を「仏」とし、「法」も四諦と八正道という初期仏教の基本理念を採用している。しかし、その最も重要な点は、各宗派が唯一絶対で正統であるというような独善性・排他性を放棄して、互いに同じ仏教徒として尊敬し、その連帯を目指すという姿勢である。事実、仏教はドイツではまだ公認宗教として認定されていないことから、そうした認定をDBUとして共同で取得する方向が要請されている。

一、ドイツ仏教連盟の特徴

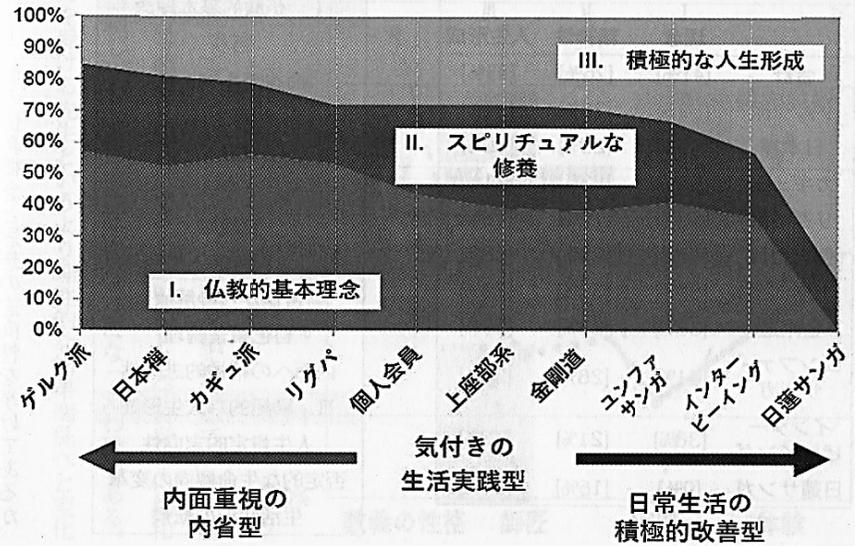
本稿ではドイツ人の仏教に帰依して実践する動機と、受容の志向性を中心に論じた。ここで日本の仏教者にとって興味深く、重要と思われる観点を簡単にまとめておきたい。

ドイツ在家仏教の特徴

フ化(表9)する。

この内省型と生活改善型の二つの中間に位置するのが、在家仏教徒として総じてスリランカなどの母国の伝統文化から自由に禅定を実践する上座部系と、さらにより宗派に拘らない個人会員である。上座部系は本来であれば現世逃避的で僧院生活を理想とする極端な内省型のはずであるが、ドイツ人在家仏教徒は転生輪廻からの解脱を目指す涅槃に対する関心が全くない(0%)。自己責任倫理や日常生活での気付きに実践の重点を置く。この中間タイプを「気付きの生活実践型」と特徴付けたい。こうして実に多様な宗派の実践志向性を禅定実践と日常生活との関わり方について、意識調査の統計結果からの試論であるが、三つのタイプに分類することができよう。これを次にグラフ化(表9)する。

表9



チャンスがある。これは一種のエキユメニズム、つまり仏教一致促進運動と見なすことができる。実際にチベット系でも禪系でも上座部系でも並行して学習・実践できる仏教センターが全国に幾つもある。D B Uの個人会員は宗派に拘らずに自由裁量で「仏教」を学習・実践できる。さらに、仏教徒であることを自称している意識調査回答者の五人に一人が、キリスト教徒として教会に在籍している。この場合、「仏教徒とは何か？」という問題が提起されるが、実は世間一般の傾向としては、禪定実践はますます「宗教」としてではなく、精神修養や心身療法として普及してきている。典型的な例がジョン・カバットジンが提唱したMBSR (マインドフルネス・ストレス低減法) で、ヘルスケアの領域に分類される。このように(西洋)ドイツにおける仏教は母国の伝統文化・慣習から解放されて大きく変貌しているのである。

三、ドイツ人が仏教を受容した文化的背景

エキゾチックな仏教に対するロマンチックな憧れや師匠に対する信頼関係を求める傾向もあるが、総じてドイツ人が仏教に求めているものは「理性的な哲理と実践」だと言えよう。その背景には個人主義、自由、平等、民主主義、啓蒙主義と科学に対する信頼などが歴史的・文化的所産としてある。そこから「超越神によつて規定ないし支配されず、教条主義・排他主義でない」哲理であると同時に、「寛容で自己責任を根本とする人生観・世界観」を求める。この場合、自身自身の体験を通したり、経験的に検証される科学的実証性が重要な意味を持つている。他方、エコロジーや菜食主義に対する関心も高く、仏や菩薩の慈悲のコンセプトはキリスト教的隣人愛と通ずるために歓迎されている。したがって、慈善行為や社会参画への傾向はアジアの仏教よりもキリスト教的精神文化の影響下にある欧米型仏教の方が強烈であるという印象を持つ。これも仏教の文化的変容の側面と見ることができよう。

ゆさりん

本稿は日蓮系研究誌に寄稿するので、私の主宰する「日蓮サンガ」ないし「題目パワー研究所」(DaimokuPower-Institut) に「ゆさりん」言述べておきたい。上記のドイツにおける文化的背景から、実践としては日蓮仏教のエッセンスとして「曼荼羅本尊の前での唱題行」だけを採用している。しかも、宗教としてではなく、人生の悩みを解決し、前向きに生きるための精神修養とか心身療法の方向で教理解釈を施し、援用している。また意識的に独善性と排他性を排除しているので、私たちの研修会やセミナーには日蓮仏教の応用実践に興味がある人は誰でも、宗教や宗派や教団への所属と無関係に自由に参加できる。日蓮の広宣流布、立正安国、異体同心という理念を広く実践し、実現したいからである。

ちなみに、『法華仏教研究』第二十一号の内容はすべて素晴らしく、大変興味深く読ませていただいた。その中で星野健一氏が私の日蓮理解について「唱題がスピリチュアルな行為だとは思えない」という趣意のことを述べている。確かに、御利益信仰が中心となる日本の伝統的宗教文化、また特に何か世俗的な目的達成のために祈るという傾向の強い創価学会の実践の枠組みでは無理もない感想である。しかし興味深いことに、その創価学会の戦後の大発展の原点は、戸田城聖の獄中における体験、つまり無心に唱題する中で自分が「虚空会の儀式に参列する地涌の菩薩の一人である」というビジョンを観たことだと聞いている。この例に漏れず、「観心」の曼荼羅本尊への唱題は、「曼荼羅本尊に入る」とか「虚空会の儀式に参列する」という比喩的表現で語られるように、マントラによる瞑想・禪定実践を根本とする。これは日常的な自我と時空間を超えた境智冥合の意識状態、純粹にスピリチュアルな世界を意味している。祈りがかなうのは「己の知恵や作為」だけによるのではない。心の傷が癒され、病気が治るのも、また総じて宿命転換も境涯革命も変毒為薬もすべ

て、題目によって薰発・励起される仏性（宇宙的な生命・意識）の働きが決定的な意味を持つ。その構造が曼荼羅本尊に描かれている。これ以上の詳細は別の機会に譲るが、私自身は日蓮仏法におけるこの精神性・スピリチュアリティをいつも実感しているし、大切にしている。

この関連で今一つ付け加えておきたいことがある。現在、ヨーロッパでは「イスラム国」の原理主義的独善性と排他性を根拠とする暴力主義の残酷さは身近な問題である。パリをはじめとして各地で無差別テロ襲撃に見舞われ、また爆弾テロの危険性も至る所で日常的に潜んでいる。ドイツではシリアなどの紛争地域からの難民を百万以上も受け入れるような状況に追い込まれている。宗教文化的衝突は避けられない。そこで、イスラム教との宗教間対話もさることながら、イスラム研究者によるムハンマドとコーランに関する批判的議論が活発に展開されているが、ファトワーによる死刑宣告を受けた知識人もいる。教条主義、独善主義、信仰擁護と聖戦のための破壊的暴力行為の正当化と行使、女性蔑視等、まるで中世の恐怖政治・暗黒時代を目のあたりにする。こうした現代社会の時代背景から日蓮研究に目を移すと、言論の自由と対話の重要性を再認識する。今回、奇しくも末木文美士氏の紹介で、こうした同じような問題意識、前向きな志向性を持つ法華仏教研究会に出会えた。主宰の花野充道氏が次のように警鐘を鳴らし、訴え続ける通りである。「現代世界は、宗教の持つ独善性と排他性が、宗教対立から宗教戦争へとエスカレートし、異教徒に対する残虐なテロ行為に対して深刻な反省が求められている時代である。そのような時代に、日蓮教団は自らの独善性と排他性をいかに抑制し、また克服していくべきであるか⁴」。その意味で、まさに日蓮教団の抗争・分裂の歴史を直視し、互いの相違を認めながらも対話を通して相互理解を深め、オープンな議論によって日蓮研究の深化を目指す当会の理念に賛同する。その同人誌の発刊・運営も私には大いなる喜びであり希望である。微力ではあるが、全面的に応援していきたい。

註

- (一) Yukio Matsudo, *Faszination Buddhismus – Beweggründe für die Hinwendung der Deutschen zum Buddhismus*, Norderstedt: BoD, 2015.
- (二) <http://www.buddhismus-deutschland.de/buddhistisches-bekentnis/>
- (三) 『法華仏教研究』第二十一号 二四五頁。
- (四) 『シリーズ日蓮』刊行の意義と今後の課題』『春秋』二〇一五年六月号 一六頁。